I－4　北條家（佐渡市）の薬箱の検討

遠藤次郎[1]・中村輝子[1]
ヴォルフガング　ミヒエル[2]
1)東京理科大学薬学部
2)九州大学大学院言語文化研究院

新潟県佐渡市金井町の北條家は医家として一七世紀後半から一九世紀半ばまで続き、昭和五二年、同家の建物は国の重要文化財（建造物）に指定された。この北條家の総合調査が平成一〇年に行われ、蒲原宏先生が医学・医療関連資料の調査を担当された（「金井町文化財調査報告」金井町教育委員会）。これらの調査結果を参考にしながら、本研究では北條家に伝わる薬箱の中に残る薬物を中心に検討し、北條家に伝わる医学資料、ならびに、演者らが調査してきた江戸～明治時代初期の薬箱と比較・考察した。

北條家の薬箱は木製、漆塗り、五段の引き出しからなり、横二〇、奥行き三〇、高さ二五センチメートル、製作年代と使用者は不明である。一段目には四五袋、二段目には四一袋、三段目・四段目には各二五袋、計一三六の薬袋中に生薬が現存し、五段目には薬包紙や薬袋中に二七種類の生薬末や製剤が残っている。これらの内、製剤一三種類、重複する八種類、不明四種類を除く、一三五種類の生薬について検討し、次の特徴を明らかにした。

（1）三段目・四段目の薬袋は一段目・二段目の薬袋よりも大きい（前者は横二八×縦八八×高さ二六、後者は二五×五八×二三ミリメートル）。また、生薬名が重複する薬袋が四段目に四つ（柴胡、茯苓、半夏、桂皮）、三段目に一つ（蒼朮）ある。これらのことから、下段（三段目・四段目）のものは使用頻度の高い生薬であることが示唆された。一般に、引き出し形の薬箱では下段に使用頻度の高い生薬を置いている。北條家の薬箱もこれに該当している。

（2）曲直瀬道三の系統を引く『衆方規矩』収載の生薬（『医療衆方規矩大成』一字画引）と比較すると、北條家の薬箱の生薬の八五％（一一五種類）が『衆方規

矩』に含まれることが判明した。このことから、この薬箱は基本的には後世派に属する医師のものであったとみられる。同家が所蔵する医方書には李朱医学を伝えた曲直瀬道三、曲直瀬玄朔、岡本玄冶などの後世派ものが多いと報告されており（蒲原宏「北條家医学・医療関係資料」）、薬箱の薬物調査の結果もこれと一致した。

（3）日本漢方の古方派の原典である『傷寒論』・『金匱要略』で用いられている生薬の出現率は、一段目・二段目では四四％、三段目では七〇％、四段目では一〇〇％であり、下段に行くほどその割合が増大した。このことから、この薬箱の持ち主は後世派の処方の中でも、『傷寒・金匱』の処方を主に使っていたことがうかがわれた。また、他の薬箱では一般的ではない「芫花、大戟、旋覆花、冬瓜子」がこの薬箱にみられる点も注目に値する。これらの生薬は『傷寒・金匱』の処方で使われる生薬ではあるが、それらの処方の使用頻度は低い。そのような処方も使っていたことを薬箱の薬物は示唆している。なお、北條家の蔵書には『仲景全書』・『金匱要略』をはじめ、吉益東洞の『類聚方』・『薬徴』などもみられることから、北條家の歴代の医師の中には古医方に傾倒した人もいたとみられる。

（4）蘭方関連の生薬がない点も注意を要する。一角の製剤、および「虫下し、セメンシイナ」の製剤のみである。蘭方の影響を受けた大分県中津の村上家の薬箱に「マンナ、エブリコ、アルテア葉、ジギタリス、アラビアゴム、接骨木花」などがみられることと比較すると、大きな違いがある。北條家の医師の中には漢蘭折衷の伊良子家で修行した人もおり、また、蔵書中に宇田川榛斎の『医範提綱』もあることから、蘭方を摂取したとみられる形跡は残っている。しかしながら、薬箱からみる限りでは蘭方の影響は少ない。

本研究は東京理科大学卒業生の石川幸乃さんの協力を得、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（一四〇二三一〇四）の一環で行った。